

『バルザス = ブレイス』に見るブルターニュ地方の民族文学の誕生 —19世紀フランスにおける国民概念の成立とロマン主義を背景に—

大場 静枝

The Birth of National Literature in Brittany through *Barzas-Breiz* : Against the Backdrop of the Concept of Nation and Romanticism in France in the Nineteenth Century

Shizue OBA

When considering the origins of nationalism, in Europe in the 19th century, the issue of the nation or ethnicity was almost exclusively taken up with language. In general, language was understood as identifying ethnicity: the language peculiar to an ethnicity gained the status of a national language and became the basis for promoting political nationalism by bringing individuals from an ethnic group together as a community.

In Europe during the 19th century, the idea that language and ethnicity were basically inseparable was reflected in the ideas of Herder, Fichte and the tide of romanticism. For many ethnic groups at that time the mission in forming a nation or an independent country was to create a history and literature written in their own language. Folk songs and folklore, which are traditions transmitted via the languages of local ethnic people, especially farmers, attracted attention as the basis for the formation of national history and literature. That is why their collection and publication were vigorously conducted.

In 1839, Hersart de la Villemarqué's *Barzas-Breiz Chants populaires de la Bretagne* was published in that context. This collection, considered as an ethnic epic, has been evaluated as having greatly influenced the birth of the ethnic movement in Brittany. The aim of this paper is to examine the relationship between nationalism and literature, especially popular poetry and folk songs, to trace the discourses about Barzas-Breiz, by literary figures who were more or less actively involved in this movement, and to clarify how this collection contributed to the birth of ethnic nationalism in Brittany.

I. はじめに

II. 19世紀のナショナリズムと文学

1. 前ロマン主義と価値観の転換
2. 国民概念とロマン主義
 - (1) 国民と言語の一体性
 - (2) 共通の記憶と国民の歴史
 - (3) ロマン主義と自由主義

III. 民謡収集による国民文学の形成

1. ヘルダーの民謡観の影響
2. 国民文学としての民謡

I. はじめに

ナショナリズムの起源を論ずる視座は一様ではない。しかしながら、ナショナリズムの起源に言及す

IV. 『バルザス = ブレイス』と民族文学の誕生

1. 郷土の民謡集から民族文学へ

- (1) ブルターニュの民謡集の誕生
- (2) 抵抗と闘争の詩歌集への変貌

2. 『バルザス = ブレイス』とブルターニュの覚醒

V. おわりに

るとき、ほぼ例外なく19世紀のヨーロッパにおいては「ネーション」と「言語」の問題が俎上にのせ

られ、一般に言語が国民や民族の同一性を規定するものとして理解されてきた。ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー（1744-1803）やヨハン・ゴットリープ・フィヒテ（1762-1814）らのドイツの思想やロマン主義の潮流を背景に、言語とネイションを一つの不可分なものとする考え方が広まり、国民や民族に「国語」の必要性が説かれた。「国語」とは、国民や民族に固有の言語で、その国民や民族を一つの共同体としてまとめ、政治的ナショナリズムを促進するための根拠となるものであった。

フランス革命を経て「国民概念」が形成されつつあった19世紀のヨーロッパで、多くの国民や民族にとって「国語」を形成するための中心的な課題となったのは、歴史的な正統性をもち文学を創造できる「独立国家の国語」に相応しい共通の教養語と、個々の国民や民族にふさわしい歴史と文学の創出であった。さらに個別性を重んじるロマン主義の潮流は、ヨーロッパのそれぞれの国や地域において人々の関心を「国民文学」へと導く側面を持っていた。

その一方で、国語形成の根拠、あるいは国民文学の基盤として歴史的な正統性を証拠づけるものとして、民衆、とりわけ農民の言語で伝えられてきた民謡に注目が集まった。その結果、民謡や民話などの民間伝承の収集と出版が活発に行われるようになった。テオドール＝クロード＝アンリ・エルサル・ド・ラ・ヴィルマルケ（1815-95）の『バルザス＝ブレイス——ブルターニュの民謡』（以下、『バルザス＝ブレイス』と略記）もまた、そうした時代背景の中で刊行された。この民謡集は後に真贋論争的となりその価値が損なわれることになるが、それでもなおブルターニュの民族運動の誕生に影響を与えたと評価されている。

本論文は、19世紀の国民意識の形成過程とロマン主義の思潮を背景にフランスにおけるナショナリズムと文学、とりわけ民衆の詩歌と民族ナショナリズムの関係を考察したうえで、一つの文学作品がブルターニュの民族ナショナリズムを象徴する「叙事詩」となった過程を跡づけることを目的としている。具体的には、民族文学を地域を越えたより大きな文化史の枠組みの中でとらえ直した後、第二版以後の『バルザス＝ブレイス』を、歴史的・文化的コンテキスト及び当時のブルターニュの知識人・文化人の言説と照合せせながら、いかにしてこの作品が「民族の叙事詩」に位置づけられるようになったかを解

明するものである。

Ⅱ. 19世紀のナショナリズムと文学

1. 前ロマン主義と価値観の転換

アンヌ＝マリ・ティエスは、ヨーロッパのナショナリズムの起源を18世紀半ばに起きた価値観の転換に求める。というのもこの時代、歴史的にも地理的にも、さらには社会的にも重心の移動が起きたからである。

18世紀中葉から、諸国民の構築に不可欠な前提となる普遍と個の関係の再検討が必要となり、それが正統とされてきた文化の変容をもたらした。その重心は三重にわたって、つまり歴史的に、地理的に、そして社会的に移動したのである。つまり重心は古代ギリシア＝ローマ文明に代わり蛮族の時代へ、地中海世界に代わりヨーロッパの北部へ、洗練されたエリートたちのサロンに代わり農村の藁葺きの民家へと移動した。新たな文化論が形成され、国民的なるものに近代を生み出す原理があるとされるようになった(Thiesse 2001: 21)。

この時代、文学の世界においても、それまで正統とされてきたものが新たに誕生した価値観に取って代わられるという現象が起きていた。文学の重心もまた南方から北方へと移動しつつあった。つまり、ギリシア・ローマ文学に範を取る古典主義から「自国の民族精神に根ざした文学」(稲垣 2009: 279)である北方の文学、すなわち(前)ロマン主義へと変わっていったのである。

その点を証左する代表的な事例が、『オシアン』(1760-73)の汎ヨーロッパ的な成功であることは論を俟たない。『オシアン』の表現は、18世紀後半においてもなお強い影響力を保持していた古典主義文学²の表現とは異なる情感を示した。ヘルダーは『オシアン』の詩篇には「弾唱詩人の強さ、簡潔さ、気高さ、及び人の心をうつ特性」(ヘルダー 1947: 125)があり、「悲劇的な物語の中からとぎれとぎれの写像、とぎれとぎれの音色しか聞かれないが、しかしこれらが人の魂に迫り、心に刺を残す」(ヘルダー 1947: 128)と述べたが、このような表現のあり様は均整や調和、規範性を重んじる古典主義の美学とは対極に位置するものであった。

以後、前ロマン派の人々は『オシアン』を範として、荒涼とした風景とそこに響きわたる追憶の物語に惹かれていくことになる。フィリップ・ヴァン・ティーゲムは、前ロマン派の文学的特徴を以下のように簡潔にまとめている。

幽境や森林や丘陵、後には海洋が前ロマン派の人々のお気に入りの景観となった。こうした景観に廃墟、古代遺跡の壮大な廃墟はもちろん、取り壊された城や見捨てられた礼拝堂のみすばらしい廃屋もつけ加えなければならない。このような廃墟は、人間の心に万物のはかなさをも語り、その憂鬱を正当化し、またその世界を想像する魂と同じく何もかも滅びはしない、あの未知なる世界へと向かう人間の憧憬を承認するのである (Van Tieghem 1944 : 11)。

ヨーロッパにおける『オシアン』の成功は、前述したように時代が古典主義の価値観から後にロマン主義と呼ばれる新しい価値観へと変わりつつあったことを裏づけるものであるが、その背景には当時の文化の覇者たる「フランス文化の専制を打倒」するという考え方が高まっていたとティエス (2001 : 30) は指摘する。換言すると、古典主義からの脱却とは、フランス文化の支配からの離脱を象徴していたのである。『オシアン』が巻き起こした反響は、フランス以外のヨーロッパ、とりわけドイツやイギリスにおいて、「ヨーロッパ文化には複数の源流があると主張できる決定的な素材」(Thiesse 2001 : 32) となる民間伝承の収集と発表の爆発的な流行をもたらすことになった。

フランスでは当時、社会的に啓蒙思想、文学的には古典主義の影響が強く、『オシアン』は諸外国ほどには人気を博すことはなかったが、その理由がフランスには前ロマン主義的な動きが欠如していたからだと考えるのは早計である³。「豊かな感受性」や「自由な感情の吐露」を称揚されたジャン＝ジャック・ルソー (1712-78) の『ジュリまたは新エロイズ』(1761) の成功⁴は、古典主義文学の伝統である理性や普遍性の尊重、技巧や規範の重視、形式美や調和の優先が退けられ、感受性の価値が発見されたことを証左するものであった。

では、18世紀後半に新たな価値観が生み出されたその原因は、いったい何に求められるのだろうか。

シュトルム・ウント・ドランク運動の代表的作家であったヴォルフガング・フォン・ゲーテ (1749-1832) は若い頃を振り返り、フランス文学は高貴であってもすでに年老いていたと語っている⁵。新しい感性を希求する人々からは、フランス文学は形式美を重んじ趣味と文体を優先させるあまり、感情の発露を犠牲にしていると考えられたのである。ロマン派の先駆者であるスタール夫人 (1766-1817) は、フランス詩を完成させ、以後、その作詩法が規範となったボワロー (1636-1711) を評して、「忌避することばかりを指摘し、理性と英知の掟ばかりを強調して、芸術の崇高な発露を損なう、ある種の術学趣味をフランス文学に持ち込んだ」(Madame de Staël 1852 : 143) と批判し、「フランス詩は現代詩の中で最も古典的であるがゆえに、唯一民衆の間に広まらない」(Madame de Staël 1852 : 147) と慨嘆した。民衆が歴史の表舞台に躍り出ようとしていた時代の転換点にあって、フランス文学はすでに老いた巨人となっていたのである⁶。文化の覇者としてヨーロッパに君臨はしても、すでに老境にさしかかっていたフランスの文芸は、革命という未曾有の混乱を経て、内的な変革を余儀なくされていった。そして、文芸の変革に影響を与えたものの一つが「国民概念の誕生」であった。

2. 国民概念とロマン主義

(1) 国民と言語の一体性

文学の内的な変革がロマン主義によってもたらされたことは周知の事実であるが、そこに国民概念がどのように関係したのか、まずはその点について考えてみたい。『フランス語歴史辞典』に拠ると、「国民 nation」という言葉が近代的な意味を持つのは、18世紀のことである。フランス革命期に、国民は第三身分や革命派の民衆と同一の政治的な実体となり、国家を構成する個人の総体と定義されるようになった」(Rey 2016 : 1478) とある。この定義は「フランス革命によって、国民はそれ自身で存在すると宣言した」(Renan 1882 : 10) と述べたエルネスト・ルナン (1823-92) の思想にも通じるものである。

19世紀の『フランス語類語大辞典』では、人民 people に対して「国民 nation とは大家族である。国民とは同じ父親の子孫であることに存する。例えばブルターニュ人とウェールズ人のように、離れた二つの人民が口にする同じ言語がその二つの人民が

本来一つの国民であったことを示している」(Morin 1824: 145)と説明されている。さらに約60年後の別の類語辞典では、「国民 nation とは共通の出自あるいは起源をもち、同じ父親の子孫である同じ種族 race の人々のいる社会である。国民を作るものは、種族と同じく、言語、伝統、信仰、慣習、気質や性格、性向などの本来的な資質である」(Lefaye 1884: 790)とその語義を定めている。つまり当時の一般的な考え方では、「国民」とは政治的かつ社会的な存在であり、その国民を構成するには「起源」と「言語」という二つの要素が関係していたということである。

これらの定義の前提には、すでに18世紀において「国民」と「言語」の関係をその考察の中心に据えていたドイツの知識人ヘルダーの思想が存在していたと考えられる。ヘルダーの国民概念について、ティエス(2001: 37-41)は次のように論評している。すなわち、「言語はどれも民族の精神の生きた、根源的な表現であり、人間のあらゆる魂から生じた行為によって何世紀もの時を経て作り上げられた」ものである。また、「国民の文化と価値観を知らせる手段として言語があり、国民形成には共通言語が必要である」。「最も自然に合った政体は国民的な一体性をもった民族によって構築され、その政府のあり方はフォルクスガイスト(民族精神)によって決定づけられる」ものであるから、「共通の母語として話される言語」なしには「共通の愛国心」も「父祖の国に固有の公衆」も形成され得ない。要するに、ヘルダーの思想を一言で表すと、「国民(民族)の魂は言語の精髓のうちに宿る」となる。

ヘルダーの思想はスラヴ圏を中心にナショナリズムが盛んであったヨーロッパの国々に大きな影響を与え、民族主義を前進させるとともに、後年、ナチ・ドイツの思想形成にも利用されたと言われている⁷。フランスではヘルダーの知名度は高くなかったとの説もあるが、親独の知識人たちはヘルダーをはじめフィヒテなどのドイツの進歩的な思想に通暁していた⁸。そのフィヒテもまた、言語を国民(民族)の帰属を決定する重要な要素だとみなした者たちの一人であった。

国家と国家を分かち最初の始原的な、そしてほんとうの意味での自然な国境とは、疑いもなくその内的な国境です。同じ言語を話す者

たちは、あらゆる人為に先だって、その自然的な本性そのものによってすでに、無数の目に見えない絆によって互いに結びつけられています。彼らは互いに理解しあい、互いの考えをますます明晰に了解しあうことができます。彼らは集まって一団をなし、自然な統一体を形づくり、不可分の全体をなしているのです(フィヒテ 1997: 149)。

ここで論じられているのは、民族が一つの不可分な国家を形成し互いを社会的かつ精神的に結びつけるためには、その絆となる本質的かつ始原的な要素が必要となるが、その要素となるものがまさに言語だということである。この点について、エティエンヌ・バリバル(1990: 61)は、フィヒテの国民概念を「国民(民族)と言語の始原的な一体性」であると端的に表現している。

(2) 共通の記憶と国民の歴史

一方で、ルナン(1882: 13-26)は「人々が言語に付与する重要性は、それを種族の徴として見ようとすることに由来する」と述べたうえで、言語重視の考え方が昂じると「国民的とみなされた、ある限定された文化に身を閉ざすようになり」、「垣根を作り、殻にこもるようになる」と主張する。さらに、彼は国民を構成すると考えられた要素の一つ一つを丹念に考察し、国民を形成するのは種族でも、土地でも、宗教でも、利益共同体でもなく、まして言語でもない結論づけ、「国民とは一つの精神的原理であり、歴史の深い複雑さの結果」にほかならないと規定した。したがって、当時の一般論とは異なり、ルナンの国民観においては、言語は国民形成の本質的な要素ではない。ルナンの国民観は国民を民族とも言語とも切り離していたために、そしてまた「国民の存在とは日々の人民投票である」というあの有名な言説があったために、きわめて今日的なものとして捉えられているが、実はその点だけを取り出してルナンの国民観を論ずるべきではない。ルナンの国民観のより重要な点は、国民とはそれを構成する人々が共通に持っている記憶の遺産の上に構築されるべきものである、という思想である⁹。

国民とは魂であり、精神的な原理です。実際のところ一体である二つのものが、この魂を、こ

の精神的な原理を構成しています。一方は過去にあり、他方は現在にあります。一方は豊かな記憶の遺産の共有であり、他方は現在の同意、ともに生きるという願望、受け継いだ共有の遺産の価値を高めようとし続ける意志です。(中略) 過去においては共通の栄光を、現在においては共通の意志をもつこと。ともに偉大なことを為し、さらに偉大なことを為そうと欲すること、これこそが国民となるための本質的な要件です (Renan 1882 : 26)。

ルナンの国民観では、過去が現在と並んで重要な柱の一つになっている。ルナンにとっての過去とは国民が共通にもつ「豊かな記憶の遺産」のことであり、その最も代表的なものが祖先崇拜である。具体的には祖先の偉業や英雄的な行為を讃えることであり、それはすなわち国民の歴史を知ることにつながっている。

フランス革命を経て市民が政治に参加し新たな文芸が誕生する中で、「国民」となった人々の関心は自らの歴史にも向けられるようになった。しかしながら、19世紀初頭のフランスにおいては、ギリシア・ローマの歴史と決別しゲルマン系フランク族の歴史とも峻別するフランスの過去は、残念ながら国民の多くには知られていなかった。その結果、己の歴史を学ぶ必要性が国民の間に生まれた。フランソワ・ギゾー (1787-1874) やオーギュスタン・ティエリ (1795-1856) らの歴史家たちは新たな国民の歴史を創るべく、従来とは異なる歴史研究の方法論を構築しようと試みた。クシトフ・ポミアン (1997 : 2273) はその点について、「歴史学の主題、対象となった国民概念は王と宮廷によって擬人化され統一化された均質な実体としてではなく、対立する異なる集団から成るものとして捉えられる」ようになったと当時の歴史学の進展を分析している。言い換えると、新たな歴史学の研究手法とは、支配者側から見た「事件史」や「偉人史」を中心とした伝統的な歴史観によって過去を捉えるものではなく、社会に存在する異なる階級や諸民族の間の絶え間ない闘争を通して過去の全体を俯瞰するというものであった¹⁰。

歴史が国民の新たな関心事になったことについて、ロマン派の詩人ジェラルド・ド・ネルヴァル (1808-55) は、次のような記述を残している。

数年前からしごく良識のある傾向が注目されている。フランスの歴史が読まれ始めたのである。中学校で古代ギリシア・ローマ史と同じくらいフランス史を知ようになり、ギリシア語やラテン語の時間をフランス語の勉強に割くようになれば、たぶん国民精神にとって大きな進歩が成し遂げられることだろうし、古いフランスの文学に対する軽侮の念が減じるという結果になるかもしれない。というのもこうしたことの全てが相互に関係しているからである (Nerval 1993 : 258)。

ネルヴァルはここできわめて重要な指摘をしている。つまり、自国の歴史や言語を学ぶことは国民精神を伸張させ、それとともに中世に遡る自国の古い文学を尊ぶ気持ちが涵養されるというのである。

フランス史の基層をギリシア・ローマ史に求めることなく、また国民史を国王や宮廷の歴史と切り離れたとき、文芸の世界に本当の意味での価値観の転換が起こった。言うなれば、それまで軽んじられてきた古代ケルト史や農民や平民を中心とした民衆史、そして中世の武勲詩や年代記、さらには民間伝承をも包含する大衆文学が、このとき意味のあるものとして立ち現れてきたのである。

(3) ロマン主義と自由主義

次に本節のもう一方の柱であるロマン主義について、ここで改めて検討したい。前述したように、ロマン主義はその初期段階において、それまで支配的だった古典主義文学からの決別と新たな価値観の獲得を求めている。スタール夫人 (1852 : 145) は「古典主義の詩とはギリシア・ローマの詩で、ロマン主義の詩とはなんらかの形で騎士道伝承に由来するものである」と定義づけたが、ロマン主義とは中世、つまり西洋のそれぞれの国がほぼ確立されたまさにその時代に一つの基盤を持つものであった。それはヴァン・ティーゲム (1944 : 92) の言うところの「ギリシア・ローマの古代を国家〔フランス〕の古代に置き換え、我々の過去に灵感の源泉を求めようとする」動きであった。

一般にロマン主義文学とは1820年から1850年にかけて、古典主義文学に代わって文壇を支配した新しい文学のことである。その特徴としては、自我の解放、感受性や主観の重視、理想への渴望、その理

想の挫折と革命に対する幻滅、現実逃避の欲求、神秘主義への傾倒、恋愛賛美、中世への憧憬、地方色、異国情緒などが挙げられるが、単純にロマン主義を古典主義との対比で捉えると、「古典主義が普遍性の文学であるのに対して、ロマン主義は個別性の文学である」（稲垣 2009：278）とすることができる。要するに「個別性の文学」であるロマン主義とは、個々の歴史の中にその文学の源泉を求める文芸運動であり、その動きは自国の民謡や民話などの民間伝承の収集にも波及するものであったということである。そしてこの方面において、フランス・ロマン主義文学に与えた諸外国の影響を看過することはできない。というのも、フランスのロマン派たちが「スペインの叙事詩やシェークスピア、ウォルター・スコット、バイロン、シラー、ゲーテや黄金時代のスペイン劇といった外国の手本に関心を示して」（Van Tieghem 1944：19）いたからである。

例えば、スタール夫人はその『文学論』や『ドイツ論』の第二部「文学と芸術」の中で、ヘルダー、初期のゲーテやシラー、クロプシュトックらドイツの詩人や作家の文学観とその作品を批評し、北方の文学を範にすべきであると説いたが、彼らの多くが民謡に大きな価値を認めていたことはここで改めて指摘するまでもないだろう。またネルヴァル（1993：246）は『十六世紀詩人論』の中で、「各民族は己の詩の根源や己の民間伝承に遡ることで自分たちに固有のものと、他民族も共通して所有しているものとを識別することができる」というフリードリヒ・シュレーゲル（1772-1829）の文芸批評の一節を引用した上で、フランス文学は古典主義と決別し、その文学的源泉である国民の歴史や古来の伝承に立ち戻ってそこから文学的靈感を得ることで、再び独自の道を歩むことができると示唆している。

ここで、文学におけるロマン主義の重要な特性の一つとして、これが純粋な文芸運動ではなく、当時の政治と切り離せない関係にあったという点を確認しておく必要があるだろう¹¹。ロマン主義が発展した時代は、ウィーン反動体制のもとで自由主義やナショナリズムの運動が各地で起こった時代でもあった。この時代、文芸に携わる人々は、文壇を形成する諸グループ、首都及び地方のアカデミーの会員たち、教養ある知識人や文化人であったが、彼らは同時に政治的傾向をもつ人々の集団でもあった。知識層はセナクルと呼ばれるグループを形成し、政治的・

宗教的・文学的な諸思想を自らの作品のみならず新聞や雑誌などの新たな媒体を通して流布した。なお、文学者が政治に関与するというこの伝統は、後の時代において国民主義、社会主義、共産主義、全体主義などさまざまな政治的局面で目撃されることになる。

自由主義陣営の旗手であったヴィクトール・ユゴー（1802-85）は、この伝統の初期の代表的な人物である。彼は政治と文学の関係を評して「文学における自由は政治における自由の娘である」（Hugo 1963：1147）と述べ、ロマン主義を「文学における自由主義にほかならない」（Hugo 1963：1148）と断言した。ユゴーにとって自由主義とは、王政復古期の専制政治から国民を解放し、共和制を基盤とする国民国家を成立させる闘いであり、ロマン主義とは、政治的保守派を支持基盤とする非妥協的な古典主義から文学を解放し、個別性の文学を探求する闘いであった。単純化して言うならば、ユゴーは自由主義社会においてこそ、ロマン主義文学が花開くと考えていたのである。

このように、当時の知識人・文化人にとって政治闘争と文学闘争は密接に関係していた。というのも国民国家の形成が推進されようとしていた時代、明らかにロマン主義文学は国民意識や民族意識の高揚に分かちがたく結びついていたからである。そしてそれが後に「国民文学」の創造へとつながっていくのである。この時代の国民文学とは、それぞれの国民や民族に固有の言語で書かれ、かつ歴史的正当性を持つ「個別性の文学」のことであり、それは民族の言葉で古くから伝えられてきた民間伝承や中世の年代記など、自国の過去にある豊穡な素材から文学的な靈感を得ることにより創られるものであった。

Ⅲ. 民謡収集による国民文学の形成

1. ヘルダーの民謡観の影響

こうして個別性の文学そのものとして、あるいは個別性の文学を形づくる豊かな素材の一つとして、フランス各地で長い時を経て伝えられてきた民謡、民話等の民間伝承に注目が集められるようになった。民間伝承、とりわけ民謡の価値を再評価する動きはロマン主義とともに醸成されていったが、その底流には遠く遡ってヘルダーの文学思想の影響があったと考えられる¹²。ヘルダー（1947：50-51）は『オシアン』をはじめとして、古代の詩人たちの詩歌を高

く評価し、学識のあるヨーロッパ人なら誰でも「いつもそれを感嘆せずには居られない」し、「それを保存せずには居られない」と、古い詩歌の収集や保存の重要性を説いている。さらに「詩、そしてなかでも歌は、その始まりにおいてはまったく民衆的なもの、すなわち簡素で、素朴で、大多数の人に関わる事柄から生まれ、豊かで誰にでも感じられる自然におけるように、それらの人たちの言語にあった」と、民謡が原初の文学であったことを述べて、「詩は歴史、出来事、秘密、奇蹟、しるしを歌った。詩は民族の独自性、言語、土地、仕事、先入観、情熱、誇り、音楽、魂、といったものの精華である」（ヘルダー 2018：304）と力説する。ヘルダーの考えに従って、民謡がその民族に固有の考え方や感情を表現するものであると仮定するならば、民謡とはまさに民族のアイデンティティを規定するための最良の証言であり、また人々を精神的に結び合わせる民族的象徴であると言えるだろう。

ヘルダーを始めとするドイツ・ロマン派の文学観はヨーロッパ中に広まっていたが、後にフランスでもロマン派を自認する作家たちがドイツの影響を受けて¹³、フランスの地方に伝わる民謡や民衆の詩歌に関心を示すことになる。早くから民謡の文学的価値に注目し、自らその収集と分析を行っていたネルヴァル（1989：754）は、「書くよりも先に、各民族は歌った。あらゆる詩はこれらの素朴な源泉から靈感を得ている」と指摘して、民謡や民間伝承こそが自国民の歴史と現在の文芸を創造した国民文学の起源であると主張する。

プリミティブな文学はすべて国民の文学である。というのもそれはその文学を採用した民族の性格と習俗に応じて、ある必要に応えるためにのみ創造されたからである。それゆえに、一粒の種に樹木の全体が含まれているように、文学の最初の試みにはその将来の成長のあらゆる萌芽が、その完成され最終的な発展の形が内に秘められているということがわかるのである（Nerval 1993：244-245）。

ティエス（2001：38）は、ヘルダーが「今日の文学を改革しそれに命を与えるには、言語と詩歌と民族が一体であった時代に遡り、現代にまでわずかに伝えられてきた原初の詩歌に靈感を求める必要があ

る」と考えたと言っているが、まさにこのヘルダーの文学的思想には、ネルヴァルのそれと重なり合うものがあると言っても誇張にはならないだろう。

2. 国民文学としての民謡

フランス革命やドイツ・ロマン主義の影響で、「国民意識」「民族自治」「自由主義」などの近代の国家思想とともに、民間伝承が国民文学の礎になるという考え方がオスマン帝国の支配下にあった地域にも急速に広まっていった。というのも、これまで見てきたように、地域の民族語で伝えられてきた民謡や民話の数々は、自国の独立性を歴史的に証明するものであり、その言語で書かれた、あるいは伝えられてきた太古からの神話や民間伝承は独立国家に相応しい国民文学を創造するための素材になると認識されたからであった。セルヴィア蜂起（1804、1815）やギリシア革命（1821）が勃発すると、オスマン帝国に抵抗するこれらキリスト教国の反乱は民族解放戦争に位置づけられ、ヨーロッパ人の間にセルヴィア人やギリシア人に対する共感が高まった。

こうした状況の中で、1824年、クロード・フォリエル（1772-1844）が『近代ギリシア民謡集』をフランスで刊行した。これはギリシア語の民謡にフランス語の対訳をつけたものであるが、ギリシア革命に対する関心の高さから、刊行されるやいなや大きな反響を呼んだ。フォリエルはその長大な「序論」の中で、当時のギリシアが置かれていた政治的な状況に言及したうえで、「トルコの軛のもとですら、現代のギリシア人はその特権も独立心も失ってはならず、征服者の国民性とは異なる己の国民性を維持している」（Fauriel 1824：ix）と語りかけ、「こうした民謡集が、近代ギリシアの国民史であるとともに、その住民の習俗をきわめて忠実に描き出した一幅の絵画となるだろう」（Fauriel 1824：xxv）とその刊行の意義を強調した。『近代ギリシア民謡集』の存在が明示したのは、ギリシア人が国民となるのに不可欠な遺産、すなわち偉大な祖先との連続性を裏づける言語と文化、国民の大地と精神に根ざした生きた民衆文学を持っているということであった（Thiesse 2001：87）。

フォリエル（1824：xxv）は、ギリシアの民謡は「始原的かつ本能的な詩、その内容においても形式においても民衆的な詩、書き記されたことのない伝承詩」であり、その詩の中には「ギリシア人気質と国民精

神との直裁で真正の表現がある。ギリシア人なら誰でも愛国心とともにそれを理解し意識する」と言う。こうした観点からこの民謡集を読むと、ここに採録されている土着の武装集団を主題とした抵抗と闘争の詩歌には、当時、オスマン帝国からの独立を求めて戦うギリシア人の民族解放が象徴的に映し出されていると言ってもいいだろう。この民謡集は、収集・編纂・刊行されたときから、オスマン・トルコからの独立の正当性を立証するものとして、また民族ナショナリズムの拠りどころとして、象徴的な存在となったのである¹⁴。

フォリエルの見解とともに、民謡が「国民文学」であり国民の遺産となり得るとの認識がフランスにおいても受容されていった。口承の民謡が消滅してしまう前に収集し、刊行することが急務であると考えられるようになり、これが国家主導による民謡の収集という一大事業に結びついたのである。1852年9月13日付の政令によって、『フランス民衆詩歌全集』の刊行が定められた。この任務を果たすため、国民教育・宗教省の中に新たに「フランス言語・歴史・芸術委員会」が設置された。収集の指針を示した『フランス言語・歴史・芸術委員会の指示書』（以下、『指示書』と略記）には、当時の民謡に対する考え方が明快に述べられている。例えば、『指示書』の序文には「詩歌集はフランス精神の最も純朴な想像力と我々の年代記の最も重要な記憶を集めた」（Cheyronnaud 1997: 84）ものとなるだろうと記されている。

『指示書』の本文の執筆を担ったジャン＝ジャック・アンペール（1800-64）は、その冒頭で自身の民謡観を表明している。すなわち、ヨーロッパのほとんどすべての国で民衆の詩歌の収集が行われているが、仮にフランスがこの点において他国に後れを取っているとすると、それはフランスに民衆詩がないからではない。その原因は、上流社会の慣習からくる、民間伝承に対する思慮を欠いた蔑視にある。このような偏見はすでに著しく弱まっているが、新時代には姿を消すべきものである。卓越した人々が民衆詩に対してそれに相応しい関心を示すよう呼びかけてきたが、その筆頭に『近代ギリシア民謡集』の編纂者であるフォリエル氏がいる。彼の繊細な趣味はこの気取りのない詩の率直な美しさをきわめて正当に評価した、とアンペールは民謡集の文学的価値を擁護している（Cheyronnaud 1997: 85）のである。

また、アンペールはもう一つ重要な点に言及している。それは収集すべき地域や言語についてである。アンペールは、フランスの海外領土も含めフランスの全領土を収集範囲とし、そこで使用されているすべての言語の民謡を収集対象とすべきであると主張した。その理由は、『フランス民衆詩歌全集』は「国民の詩歌集」として着想されたものであるから、フランス語以外の言語で作られた民謡を除外すると、「〔国民の詩歌集〕という意味で」不完全なものになってしまうからである（Cheyronnaud 1997: 87）。このアンペールの主張は、前述の「対立した異なる集団からなる国家」とルナンの「民族や言語から切り離れた国民」という考え方を想起させ、この時代のフランスにおいて多民族から成る一つの国家という国民観が一般に広まっていたことが確認できる¹⁵。

IV. 『バルザス＝ブレイス』と民族文学の誕生

1. 郷土の民謡集から民族文学へ

(1) ブルターニュの民謡集の誕生

フォリエルの『近代ギリシア民謡集』の出版から15年後の1839年、ラ・ヴィルマルケは『バルザス＝ブレイス』を刊行した。ラ・ヴィルマルケの民謡集は『近代ギリシア民謡集』と同じ体裁で作られており、明らかにフォリエルの民謡集を意識していたと考えられる¹⁶。この点について、フランシス・グルヴィル（1960: 77）は、ラ・ヴィルマルケが政治的にも文学的にも大いに注目を集めたフォリエルの『近代ギリシア民謡集』に匹敵する民謡集をブルターニュ地方にも与えようとする意図を持っていたと推測しているが、弱冠24歳であったラ・ヴィルマルケ青年の生活ぶりや文学的野心を考慮すると、彼の気持ちがこの時期にすでに「ナショナリズム文学」を志向していたとは必ずしも言えない。むしろ当時の交友関係や刊行以前にラマルティエヌ（1790-1869）らに詩歌の一部を送っていたことを念頭におくと、自らの文学的な成功こそが『バルザス＝ブレイス』の刊行の目的であったと考えるほうが自然であろう¹⁷。

したがってラ・ヴィルマルケにはおそらく、『バルザス＝ブレイス』をイギリスやドイツ、スペイン等、民謡の収集と出版においてフランスに先んじていた国々に対して、またパリの文壇に対して、ブルターニュにも諸外国の民謡に匹敵する民衆の詩歌が存在したことを証明しようとする意図以上のもの

はなかったと思われる。この点については、彼 (La Villemarqué 1839 : ii) が初版の序文の冒頭で「フランスの諸地方の一つに対して、今指摘したばかりの欠落〔諸外国に対抗できる民謡集がないこと〕を埋めようとした」と述べていることから明らかである。また、同序文の中でラ・ヴィルマルケがブルターニュの詩歌を「フランスの一地方」の民謡集として扱っており、フォリエルの民謡集を意識していたとはいえ、『バルザス＝ブレイス』には『近代ギリシア民謡集』が持つ強い政治的なメッセージ性はなく、またブルターニュの独立を訴えるような内容でもなかったということを附言しておこう。

ラ・ヴィルマルケ青年がパリの文壇の知己に献本を重ねた甲斐もあって¹⁸、『バルザス＝ブレイス』は徐々に新聞・雑誌の書評欄や作家たちの作品の中で取り上げられるようになり、その知名度は上がっていった¹⁹。この成功の陰にはもちろん、すでに見たように国民意識の成立とロマン主義を背景に、民間伝承に対する見方が変わりつつあったという、時代的なタイミングもあった²⁰。多くの好意的な書評の中で特に注目したいのが、『バルザス＝ブレイス』をナショナリズムの書として扱っているものである。例えば1839年10月15日付けの『ガゼット・ド・フランス』紙の書評には、「ラ・ヴィルマルケ氏はブルターニュの農民たちが古の国語を心から大切に、数世紀もの間、ケルト民族の人々に固有の記憶力の良さと〔彼らが〕強固な意志でそれを守り続けてきたことを明らかにした」、「彼は良き趣味と真の愛国心を示した」、「今日かつてないほど諸地方が諸革命によって隷属させられ、中央集権制によって縛りつけられたこの軛から己を解放しようと努力するのを目にして、ラ・ヴィルマルケ氏はブルターニュ地方が政治的なナショナリティを回復するまでの間、少なくともこの地方に詩的なナショナリティを回復した」と書かれている。この書評の背景には、民謡が、国民あるいは民族の記憶を保持しているがゆえに、その国民性や民族性を体現する存在となるという考え方があったと思われる。そして、それは「国民文学」の成立を模索しつつあったフランスにおいては、ごく自然な思考でもあった。

(2) 抵抗と闘争の詩歌集への変貌

一地方の民謡集といえども国民文学の一角に座を占めることが可能であった時代にあつて、中央の新

聞・雑誌の書評や作者の文学的野心にもかかわらず、『バルザス＝ブレイス』はフランス国民の傑作にはならなかった。その理由は、この年若き文学青年が「国民文学の創造」という当時の文芸の動向を正確に把握していなかったからではないだろうか。ユゴーのエルナニ事件で幕を開けた1830年代のフランスは、まさに文学と政治が分かち難く結びついていた時代であった。ティエス (2001 : 127) が考察するように、この時代、「国民的な名作とは明白な政治的目的を持つもの」であり、民族の物語が国民の叙事詩の地位を獲得するには、それが「国民の歴史、すなわち何世紀にもわたって自由を求め、圧政に立ち向かい、主権を勝ち取る闘争物語」として立ち現れるものでなければならなかった。さらに1830年代は、アングロ＝ノルマン方言で書かれた武勲詩『ロランの歌』(1835年に発見)をはじめとして、いくつものテキストが国民の叙事詩の座に名乗りを上げていた時代でもあったが、これらの作品に比べると『バルザス＝ブレイス』の初版はいまだ、ナショナルな特徴を十分に備えているとは言い難かったのである。

『バルザス＝ブレイス』はフランス国民の文学にはならなかったが、その後、ブルターニュ地方の「民族文学」となる。ただし、それには第二版 (1845) の刊行を待たねばならなかった。『バルザス＝ブレイス』が中央の新聞・雑誌の書評や一部の人々から「民族ナショナリティ」を象徴する作品として評価されたという事実は、ラ・ヴィルマルケの意識にも変化をもたらしたと考えられる²¹。というのも初版から第二版の刊行までの6年の間に大幅な増補が行われ、その多くがナショナリズム色の強い民謡ばかりであったからである。追加された民謡は、「ガリア人のワイン、そして剣の舞」「アーサーの進軍」「ノメノエの年貢」「タカ」「炎のジャンヌ」「デュ・ゲ克蘭の名づけ子」「カトリック同盟員」「ボンカレックの死」「サン＝カストの戦い」「共和派」など約30編に及ぶが、数編を除いて全てがブルターニュを侵略する諸外国との戦いの歌か、あるいはブルターニュを不当に支配した外国人抑圧者に対する抵抗の歌か、はたまたブルターニュのために命を落とした不運な愛国者たちへの哀歌であった。

古代にはガリア人、中世初期にはフランク人、中世後期にはイギリス人とフランス人、1532年のフランス王国によるブルターニュ公国併合後はフラン

ス人が民族の敵として名指しされる。これら民族主義的な色彩を帯びた詩歌には、明らかに圧制者である「奴ら」に闘いを挑む「我ら」の対比が浮き彫りにされている。第二版は「フランスの一地方の民謡集」というよりはむしろ、『近代ギリシア民謡集』が有する独立を志向する民族の「国民文学」の特徴が見られるのである。

例えば、「ガリア人のワイン、そして剣の舞」では「流れているのはガリア人の血だ。わたしは荒々しい戦闘の中で血とワインを飲んだ」と歌われ、「炎のジャンヌ」では「炎のジャンヌは野営地の四隅に火を放った。(中略) テントは燃え上がり、フランス人は焼け焦げた。彼らのうち三〇〇〇人は灰になり、逃げたのは一〇〇人足らずだった。さて翌日、炎のジャンヌは窓辺で微笑んでいた。野山を見やりながら、焼き討ちされたテントを眺めながら」と敵を壊滅させたジャンヌ・ド・モンフォールの満足げな様子が描き出されている。また「デュ・ゲ克蘭の名づけ子」においては、「ロジェルソンは殺された。(中略) 抑圧者の城砦は打ち壊された。イギリス人にとっては良い教訓だ！」と圧制者を嘲笑い、「カトリック同盟員」においては「神が霜を降らせますように！ブルターニュ人を裏切ったフランス人の畑で小麦が枯れますように！」と裏切り者たちを呪詛している²²。こうしたブルターニュ人对フランス人という感情的かつ政治的な対立を表現する「ナショナルな」調子は、1839年版の民謡集にはほとんど見られないが、1845年版の民謡集では、解題においても詩歌においてもこの調子が大きく強調されている (Gourvil 1960: 108)。

ラ・ヴィルマルケは一連の歴史的詩歌を通して、バス＝ブルターニュの人々がフランク人侵略者から独立を果たしたその起源に対する強い感情を心に抱いていたことを証明しようとした (Guiomar 1997: 3480) と論評されているが、この独立国であった起源に対する強い気持ち、愛着あるいは郷愁と言ってもよいこの感情は、とりわけ建国の父ノミノエ²³の歌に仮託されている。「ノミノエの年貢」の中で歌われているのは、祖国解放の英雄ノミノエが、理不尽な理由でブルターニュ人を殺害したフランク人に対して、祖国の指導者としてその正義を行使し復讐を果たす物語である。

「望む人間こそ成し遂げられる人間です。成し

遂げられる人間はフランク人を追い払うのです。フランク人を追い払い、自国を守り、フランク人に復讐し、これからも復讐するのです。生きていようが死んでいようが、復讐するのです。わたしの息子カロは、わたしのかわいそうな息子カロは破門の身のフランク人に首を刎ねられました。」老人は涙にかき暮れ、その涙は白髪混じりの顎髭を伝って流れ、夜明けのユリの上の露のように輝いていた。それを見た領主〔ノメノエ〕は、恐ろしくそして情け容赦のない誓いを立てた。「この猪の頭にかけて、そしてそれを射抜いた矢にかけて誓う。わたしの右手の血を洗う前に、我が国の傷を洗うことだろう。」 (ラ・ヴィルマルケ 2018: 141)

この「ノメノエの年貢」は、ジョルジュ・サンド (1804-76) をして『イリアス』を凌駕すると言わしめた民謡であるが、ティエリもまたこの詩歌を称賛した者の一人であった。ラ・ヴィルマルケ (2018: 139) は「驚嘆すべき美しさをもつ一編の詩だ。(中略) 独立というこの偉大な行為を明確にする出来事を物語っている。(中略) それは愛国心に燃えた王の長きにわたった無為と彼の突然の覚醒という、力強い象徴を表す一幅の絵画である」と述べたティエリの言葉を伝えている。この歌を、ティエリにならって祖国の解放戦争に勝利した偉大な王の覚醒の物語として読むとき、隷属という長い眠りから覚醒し民族解放に立ち上がるブルターニュ人の姿が立ち現れてくるのである。

歴史家アルテュール・ド・ラ・ボルドリ (1827-1901) もまた、この詩歌をこよなく愛した。彼は、1857年に開催された「ブルターニュ協会²⁴」のルドン大会において、ブルターニュの独立とバロン平原の戦闘に関する講演を行い、「ノメノエの年貢」を朗読した。そのときの様子が会報で報告されたが、ラ・ボルドリは「社会秩序における戦士の気高い使命とこの世における戦争の有意性を称えるための熱い言葉を発し、(中略) 会場の拍手喝采は彼の愛国心が満場に理解されたことを証明した」 (Tanguy 1977: 328) と記述されている。

以上の考察と同時代人の証言から、第二版の大幅な増補によって、『バルザス＝ブレイス』が一地方の郷土の民謡集から民族ナショナリズムを鼓舞する詩歌集へと変貌を遂げたことは明白であろう。

2. 『バルザス＝ブレイス』とブルターニュの覚醒

ブルターニュに民族ナショナリズムが萌しつつあったこの時期に、『バルザス＝ブレイス』は、おそらく同時代にヨーロッパで成立した他の多くの民謡集と同様、民族の叙事詩となるには恰好の存在であった。しかしながら、『バルザス＝ブレイス』の真贋をめぐって引き起こされた学術論争を境に、この作品に対する評価が両義的なものとなった。ラ・ヴィルマルケが採集した民謡が、農民たちが歌い継いできた真正の民謡ではなく、彼の創作であるという疑義が指摘されたのである。1872年、民謡収集家のフランソワ＝マリ・リュゼル（1821-1895）が学術会議でこの疑義を公に提起すると、新聞をも巻き込む一大論争となった²⁵。リュゼルら次世代の収集家たちは実際に現場で『バルザス＝ブレイス』に収められた民謡の検証を行い、抵抗の歌の痕跡もナショナルな感情を示す証言もなにも一つ見つけることができなかつた（Guiomar 1997: 3480）と主張した。

その後、論争は1895年のラ・ヴィルマルケの死をもって一応の決着を見るが²⁶、それでもなおしばらくの間、公の場で作品への言及を控える風潮があった。例えば、ラ・ヴィルマルケも生前重要なメンバーであったブルターニュ協会のランバル大会（1907年開催）において、エストゥルベイヨン侯爵は「ブルターニュは外国の毒に侵され」、「己を見失いフランスの一部に墮し」、「恥辱で生気を失って」と警鐘を鳴らしたうえで、それに抵抗し闘って、ブルターニュを滅びさせてはならないと熱弁を奮ったが、その演説の中で一言も『バルザス＝ブレイス』に言及せず、また想起することもなかつた（Tanguy 1977: 386-387）と指摘されている。

一方、リュゼルやアナトール・ル・ブラス（1859-1926）らは「ブルターニュの真の民謡集」を世に問うべく、精力的に民謡の収集を行い、その編纂・刊行を行った。彼らが学術的な手法で採集した膨大な数の民衆の詩歌は学術界や文化人のみならず、バス＝ブルターニュの民衆の間でも成功を取めた（Guiomar 1997: 3504）と言われているが、民族ナショナリズムへの影響という点ではほとんどインパクトを与えなかった。

この点について、初期の民族ナショナリストたちの言葉に耳を傾けてみよう。彼らはいずれもブルターニュの民族運動の起源とされている、ブルター

ニュ地方分権主義連合 Union Régionaliste Bretonne（以下、URBと略記）の創設に関わった者たちである。URBの初代会長で作家のル・ブラスは、文学作品としての『バルザス＝ブレイス』を高く評価し、「『バルザス＝ブレイス』の登場は、真のブルターニュ・ルネッサンスの兆しである²⁷」（Gourvil 1960: 527）と論評した。また、「ドルイド」の称号をもつ詩人ジャン・ル・フステック（1855-1910）は、「『バルザス＝ブレイス』によって、（中略）我々は民族の魂を辿るのだ。我々はいたいの場合、その考え方や言語の中に我々の魂が現れるのを目にし、その独立において妥協しない民族の魂を見る。種族の魂はただ栄光を、ただ民族の栄光だけを歌い上げているのだ²⁸」と絶賛した。一方、ジャーナリストのルイ・ティエルラン（1846-1915）は、「ブルターニュ人民の栄光やブルトン語の発展にとって、これ〔『バルザス＝ブレイス』〕以上に価値のある民謡集は、それがいかに学術的なものであっても他にはない²⁹」（Gourvil 1960: 526）と言い切った。

これらの言説から分かることは、農民たちの口承を忠実に集めたリュゼルらの民謡集に比べて、『バルザス＝ブレイス』には民族ナショナリストたちの心を動かす何かがあったということである。では、民族ナショナリズムへの影響という見地から見て、『バルザス＝ブレイス』が他の民謡集よりも優れていた点は何だったのだろうか。この疑問の答えの一端は、アントニー・D・スミスやE. J. ホブズボームらのナショナリズム研究の成果を援用することで得られるだろう。民族ナショナリストたちの気持ちを高揚させ、運動を推進するために必要な「民族の歴史書」に求められている条件を、スミス（1999: 32）は次のように説明する。すなわち「重要なものは、歴史的記録の信憑性ではなく、ましてや『客観的』方法による歴史記述の試みなどでもなく、その記録から明らかに感じとられるような詩的で、教訓的な、共同体の統合を目指すような諸目的に他ならない。『歴史』は、この意味で、物語を語るものではなくなければならない。叙述することによって人を喜ばせ、満足させるものでなければならない。ホメロスの叙事詩やオシアンが語るように、全てを語るものでなければならない」と。この考えに従うと、『バルザス＝ブレイス』は、リュゼルらの民謡集とは異なり、「民族の歴史書」あるいは「民族の叙事詩」となるに足る神話性や象徴性を有していたというこ

とになる。

ここで、共同体によって「民族の叙事詩」として認識されるために必要な文学的要素についても考えてみたい。前述したように、『バルザス＝ブレイス』に続く民謡集は、学術的にいかに優れていようとも民族の叙事詩となることは叶わなかった。それはなぜだろうか。その点を解明する鍵の一つは、ロマン主義文学の特徴である「感受性」や「感情」にあると考えられる。これまで見てきたように、ロマン主義は「感受性」と「心情」に大きな価値を置く文芸運動である。ヴァン・ティーゲム（1944：105）に言わせれば、感受性はロマン主義にとってあらゆる物事の価値判断をつかさどるものである。一方、民族共同体にとってその一体性を確認するために重要な要素の一つである「感情的な紐帯」は、感受性や共感から生まれるものである。となると、「民族の叙事詩」に対する共感は、ある意味で、愛国的団結と闘争への暗黙のメッセージになり得るのではないだろうか。

ここで再び『バルザス＝ブレイス』を取り上げよう。この民謡集の中で目を引くのは、民族意識に基づく対立の構図ばかりではない。祖国を守るために戦うという愛国心に満ちた感動的な表現もまた、これらの歌謡の特徴になっている。例えば、前述の「カトリック同盟員」にも「これが国の兵士たちです。真の信仰を守るためユグノーに立ち向かい、そしてイギリス人やフランス人に抗して、そして私たちの国を火災以上にひどく荒らす者たち全てに対して、バス＝ブルターニュを守るために結集した兵士たちです」と愛国の戦士たちが行進する様が描き出される。「アーサーの進軍」では「戦いで刺されて倒れるなら、我らは我らの血で自らを洗礼するだろう。心は喜びに満たされて死ぬだろう」、あるいは「共和派」でも「わたしは国のために戦うでしょう。もし命を落とす必要があるのなら、そういたしましょう。自らすすんで、そして、また喜んで」と高らかに歌われている。

戦いの歌や抵抗の歌に彩られた民謡集の中に貫かれているのは、愛国心と自己犠牲の精神である。ラ・ヴィルマルケはこれらの民謡の中にブルターニュ人の心的傾向を読み取り、彼らは「自分たち自身が、自分たちの国が、そして自分の子孫すべてが、隷属するよりも戦いで死ぬことの方を選ぶのだ」（ラ・ヴィルマルケ 2018：208）と述べているが、このよ

うに祖国の自由のために命を賭して戦う名もなき人々の生き様は、読む人の心に訴えかけ、その心を揺さぶらないではおかない。

さらにこの民謡集は、祖先が耐え忍んだ過酷な生活の日々を歌い上げる。例えば、「農民」の中で歌われる人々の生活は厳しい。「農民は季節を問わず働いています。寒い日も暑い日も、雪が降っても、雹が降っても、雷が鳴っても、風が吹いても、（中略）あなたは彼が畑で体を半分に折り曲げて働いているのを目にすることでしょう。（中略）多くの人が彼を見下しています。これが私たちの人生なのです。何ということでしょう。私たちのとても辛い人生なのです。私たちの星は不吉です。私たちの境遇は耐え難いものです。夜も昼も休みなしです！」。あるいは「過ぎ去りし時代」の歌もまた、読者の悲しみを誘う。「世の中はますます悪くなる。ますます酷くなる。それが分からないのは愚か者だ。（中略）輝く黄金が木々の上から降ってくると信じた者は〔愚か者だ〕。木々の上から降ってくるのは枯葉だけだ。（中略）貧乏人たちのベッドを作るための、黄金のように黄色い葉っぱだけが。」こうした歌謡の一節が、現実の厳しい生活と重なり人々の共感を呼び覚ますのである。

「民族の叙事詩」として何よりも重要なことは、それを読んだ人々が民族の闘争を自身の闘争として、民族の不運を自身の不運として感じることである。人々の共感を誘うのは、農民たちが土地の言葉で歌う荒削りで粗野な民謡ではなく、詩情あふれる感動的な言葉で綴られた物語詩なのである。だからこそ、リュゼル（1872：25）が「バルザス＝ブレイス論争」において、『バルザス＝ブレイス』の民謡が「これらの美しい、とても詩的でとても規則正しい、きわめて完成度の高い、概してとても洗練された趣味の物語詩、そしてとても高尚な雰囲気、文明化の途上にある時代にしては高尚すぎる雰囲気^{パレード}の物語詩」であるとしてその真正性を否定した、まさにその同じ理由がこの作品をして「民族の叙事詩」にまで高めた要因の一つであった。

ラ・ボルドリは『バルザス＝ブレイス』がラ・ヴィルマルケによって改変されたものであることを認識しつつもその文学性を大きく評価し、「次のことは異論の余地はない。（中略）この民謡集は文学的な観点から言えば傑作であり、ブルターニュの名誉でありまた栄光である」（Tanguy 1977：329）と称賛し

た。この言葉によってラ・ボルドリは、『バルザス＝ブレイス』が地域の内外に誇るべき「民族の叙事詩」であり、郷土の文学であると明言したのである。

最後に、『バルザス＝ブレイス』がブルターニュの人々に自らの郷土と文学に対する誇りを与えたことを述べよう。初版が刊行されて間もなく、政治家のヴァンサン・オードリアン・ケルドレル（1815-1899）は、文化的に価値のあるものはブルターニュには何一つないと誹謗されていたブルターニュ人の恥辱を、ラ・ヴィルマルケが雪いでくれたと熱く語った（Guiomar 1997: 3513 注 55）が、誇れる文芸作品が郷土に存在するという事実が人々の自信を回復したのである。これらの言葉が明らかにしているのは、『バルザス＝ブレイス』を契機にブルターニュの人々がアイデンティティに目覚め、郷土に誇りを抱き始めたということである。

その後、『バルザス＝ブレイス』は、この民謡集を手にとった多くのブルターニュ人に特別な感情を呼び起こし、人々の目を郷土が抱える社会問題へと向けさせた。これがブルターニュ人の覚醒であり、後に「エムザオ」Emsav³⁰と呼ばれるブルターニュの民族運動の端緒であった。両大戦間期から第二次世界大戦初期にかけて急進派を牽引したオリエ・モルドレル（1901-1985）は、戦後、戦犯として二度の死刑宣告を受けながらも亡命先で認めた回想録の中で、「ブルターニュ人は覚醒し、自らの権利と利益、そして民族自決のために立ち上がったが、このブルターニュのナショナリズムの源にはラ・ヴィルマルケと『バルザス＝ブレイス』があった」（973: 24）と証言した。

V・おわりに

以上、本論文は、民族ナショナリズムが生成した時期に、『バルザス＝ブレイス』という一つの民謡集がいかにしてブルターニュ地方の民族文学の原点になったのかを立証するものである。具体的には、フランス革命以後、ナショナリズムを生み出すことになる国民意識の形成とロマン主義の潮流を背景に、民謡集の存在意義と本作品が民族文学へと変遷していく過程の検証を行った。

前半部で本論の対象としたのは、文化史の枠組みの中に『バルザス＝ブレイス』を正確に位置づけるため、まずその前史となるヨーロッパ及びフランスにおける国民意識の形成とロマン主義の潮流を俯

瞰し、（民族）ナショナリズムの生成と発展を促す要素の一つが「国民（民族）文学」の創造であることを確認することであった。

後半部では、民衆の詩歌と民族ナショナリズムの一般的な関係をヘルダーの著作から考察したうえで、『バルザス＝ブレイス』を事例に、この作品がなぜナショナリストたちの「民族の叙事詩」となり得たかを論証することを中心課題とした。具体的には、初版の刊行から第二版の増補、学術論争を経て、この作品が民族ナショナルな特徴を備えたその来歴を確認し、初期の民族ナショナリストたちの証言と作品の内容を比較検討することで、本作品がブルターニュ地方の民族共同体において「民族の叙事詩」となった過程を跡づけた。

ギヨマール（1997: 3504-3505）は「ブルターニュの民族運動の支持がなければ、『バルザス＝ブレイス』が忘却を逃れ得たかは分からない。（中略）ブルターニュ民族運動の誕生は『バルザス＝ブレイス』にのみ由来するわけではないが、この作品なしには継続することはなかったのではないか」との興味深い指摘を残したが、この言葉はいみじくも民族運動と文学の関係を言い当てていると言ってもよいだろう。なぜなら『バルザス＝ブレイス』のような「民族の叙事詩」は、民族運動によってその存在意義を高めることができるナショナリズム文学の代表例だからであり、民族のアイデンティティの根拠の一つを言語に結びつけるブルターニュのような共同体においては、言語の復興と文学の発展が運動の柱となるからである。この意味において、『バルザス＝ブレイス』は、両大戦間期から第二次世界大戦下に進展したブルターニュの民族運動のまさに原点であったと言えよう。

付記

本論文は、2019年度～2021年度科学研究費助成金（基盤研究（C））「フランス・ブルターニュ地方における近現代の文芸運動とナショナリズム」（課題番号 19K00477）の研究成果の一部である。

注

- 1 民衆が歌い継いできたゲール語の古詩を英語に翻訳した『オシアン』には、従来の古典主義や教条主義の詩には見られなかった新しい表現形式が見られ、それが当時大きく評価された(大場2017:62)。本稿では、「オシアン作品群」(『古詩断章』から始まり『フィンガル』『テモラ』、さらには『古詩断章』の一部と『フィンガル』『テモラ』を合わせた『オシアンの作品』、『オシアンの作品』の改訂版である『オシアンの詩』を指す)を『オシアン』と表記する。
- 2 この点について、辻昶(1954:8)はその訳書『フランスロマン主義』の訳注のなかで、「古典主義は18世紀の初頭以降凋落をみながらも存続し、19世紀初葉にロマン派が出現してこれに闘いを挑むまで文壇の支配的勢力となっていた」と述べている。
- 3 拙論(大場2017:63-64)の第II章第2節「啓蒙思想下の『オシアン』」を参照。
- 4 なお、ポール・ヴァン・ティーゲム(1917:217-219)は、ルソーの『新エロイズ』には『オシアン』の世界観と重なり合う点があると指摘している。
- 5 ゲーテ(1997:第3巻65)はその自伝『詩と真実』の中で、「フランス文学自体に努力する青年を引きつけるよりは反発させずにはおかないような性質があったのである。すなわち、フランス文学は年老い、高貴であった。そしてこの二つは、生の享受と自由を求める青年を喜ばせるようなものではなかった」と述懐している。
- 6 この点について、ヴァン・ティーゲム(1944:7)は「[あらたな価値観が生まれた]その原因は文化の全般的な進展の中にあるし、数多の経済的及び政治的な条件とも関係している。こうした感受性の変遷はおそらく、厳格さから感受性へと移行しつつあった文化の老朽化から生まれた当然の帰結なのである」と指摘した。
- 7 アンダーソン(2007:121)は、ヘルダーの「あらゆる民は国民であり、それ自身の国民的性格とそれ自身の言語をもつ」という主張を引用して、「このすばらしく狭小なヨーロッパ的国民概念、私有財産の言語と結合した国民の概念は、十九世紀ヨーロッパにおいて広範な影響をもち、さらにより狭く、ナショナリズムの性格に関する後年の理論化に影響を及ぼした」と考察している。
- 8 テイエス(2001:42-43)は「ヘルダーの諸作品はかなり早くから若干の知識人たちに知られ、スタール夫人からは賞賛の言葉で紹介されたが、ほとんど翻訳されなかった。ヘルダーの主著の中でフランス語に翻訳された作品は唯一、エドガール・キネの訳で1827年から28年にかけて刊行された『人間史論』だけであった。フランスではヘルダーの思想は知られていなかったわけではないが、伝統や言語、民族の魂の中に根ざすものを論じる一般論として入ってきたのである」と述べたが、ヘルダーの名前と思想は自由主義陣営の作家や知識人には良く知られていたと考えるべきである。例えば、スタングール(1981:488)はスタール夫人の作品に親しんでいた者の一人であるが、その『日記』の中でヘルダーをドイツの偉人の一人に挙げている。一方、ブルターニュの文化人についても、その多くが民俗学の先進国であったドイツの思想に関心を抱いており、ヘルダーの著作にも接していたと考えるほうが自然である。
- 9 アンダーソン(2007:326-335)やティエス(2001:11-18)らの先行研究を参照。
- 10 ティエリは「諸民族の内政史は、被征服民族とこれを征服した一民族もしくは多数の民族との間の間断のない闘争史にほかならない」(Van Tieghem 1944:96)という理論を提唱している。
- 11 ヴァン・ティーゲム(1944:19)は、政治が絡んで複雑になったロマン主義文学について、「文人や趣味人を分けていたのは、明らかに政治であって文学ではない」と述べて、文壇と政治が不可分であったことを指摘している。
- 12 ヴァン・ティーゲム(1944:12)は、「新しい感情とともに文芸作品を創ろうと試みた前ロマン派の人々は、フランス以外の諸国にその手本を求めなければならなかった。彼らはその手本をイギリス、ドイツ両国の作品に見いだした」と指摘し、ドイツの影響がすでに18世紀後半の前ロマン主義の時代から存在していたことを明示した。
- 13 例えば、民間伝承に大きな関心を寄せていたジョルジュ・サンド(1980:205)は、そのエッセイ『村の散策』の中で「ドイツは幻想文学の伝統的な土地柄だとみなされています。それは古今の作家が詩歌や物語、物語詩の中に民間伝承を定着させたからです」と述べて、ドイツがこの分野で先んじていることや、民間伝承が素材として使われて「幻想文学」という新たな分野を創りだしたことを示唆している。ネルヴァル(1993:245)もまた、「そして全員[ウォルター・スコット、バイロン、シラーやゲーテ]が、ヒポクレネの泉より祖国の伝承とその根源的な靈感の泉に喉をうるおした」と記し、ドイツ文学が早々に古典主義から脱却していたと見ている。
- 14 この民謡集を契機に欧州のみならず米国においても

- ギリシアを支援する各種団体が結成され、ギリシアに送るべく武器や資金、義勇兵が徴募された (Thiesse 2001 : 92)。この事実が意味するのは、「民族の叙事詩」には共感力を高める作用があり、それが人々を行動に駆り立てるといふことである。
- 15 とはいえ、この事実だけでフランスが多言語社会を容認していたと考えることはできない。というのもフランスは革命以来、一言語主義を採用しており、一連のジュール・フェリー法 (1881-82年) の成立とともに、公教育からの地域語の排除が強硬に推し進められたからである。
- 16 表紙、版型、巻数 (全2巻)、ページレイアウト (左頁に原語、右頁にフランス語の対訳)、構成 (序文、序論、詩歌のジャンル分け) 等全てが酷似している。
- 17 拙論 (大場2017 : 63-64) の第IV章第1節「『バルザス＝ブレイス』誕生の経緯」を参照。
- 18 グルヴィル (1960 : 77-78) は、ラ・ヴィルマルケが100人以上の知己に献本をしたと述べているが、その中にはサント＝ブーヴ、ユゴー、フォリエル、ラマルティース、ティエリ、ブリザー、公教育大臣のサルヴァンディ、レディ・ゲストらの著名人が含まれていた。
- 19 この作品はパリのインテリゲンチアの間では大成功を取めたが、一般大衆にはほとんど知られていなかった (Nicolas 2007 : 44)。
- 20 1839年10月22日付けの文芸付録『スプレマン・デュ・ジュルナル・デ・ヴィル・エ・デ・カンパーニュ』紙も「民間の伝説やバラード、古い年代記がこれまでになく関心を持たれている。これらの貴重な文化遺産の研究はかつてないほど進展している」と『バルザス＝ブレイス』が刊行時期に恵まれていたことを記している (Gourvil 1960 : 79-80)。
- 21 ラ・ヴィルマルケがいわゆる民族ナショナリストではなかった点に留意する必要がある。貴族出身でその教育をフランス語で受けたラ・ヴィルマルケにとって、フランスもまた祖国であった。その点については、全編をフランス語に改訂した第3版の序文の中で、ブルターニュがフランスの一部であることを明言していることから証左される (La Villemarqué 1963 : viii)。
- 22 以下、引用した『バルザス＝ブレイス』の民謡の翻訳は全て、山内淳監訳・大場静枝他訳 (2018)、『ブルターニュ古謡集—バルザス＝ブレイス』による。
- 23 フランス語ではNominoé「ノミノエ」の表記が一般的であるが、『バルザス＝ブレイス』においてはNoménoé「ノメノエ」と記されている。
- 24 農学者及び歴史学者によって1843年に設立されたブルターニュ協会は、農業改革、考古学、歴史学を扱う学会である。ブリザー、ラ・ヴィルマルケ、ラ・ボルドリ、ル・ブラース、ジョセフ・ロットら多くの知識人、文化人が参加した。
- 25 拙論 (大場2017 : 63-64) の第V章第1節「『バルザス＝ブレイス論争』の争点」を参照。
- 26 考古学者のガストン・マスペロはラ・ヴィルマルケの追悼演説の中で、ラ・ヴィルマルケが採集した詩歌を扱うにあたって、学術的に求められる厳密さを尊重しなかったことを自ら認めたと言ったうえで、「〔『バルザス＝ブレイス』の〕起源の問題が決着した今こそ、各々はこの民謡集を紐解き、それが立ちのぼらせる詩情に魅了されましょう」 (Guiomar 1997 : 3501) と述べて、ラ・ヴィルマルケの功績を忍んだ。
- 27 本引用の出典はグルヴィルに拠ると次の通りである。Le Braz, Anatole (1905), *Le Théâtre celtique*, Paris, Calmann-Lévy, p. 161.
- 28 本引用は、『ルヴュ・ド・ブルターニュ』誌に転載された、ブルターニュ地方分権主義連合の第6回大会の報告書の中で言及されたル・フステックの講演「『バルザス＝ブレイス』とブルターニュの詩的魂」の報告の一部である (*Revue de Bretagne*, pp. 296-297)。
- 29 本引用の出典はグルヴィルに拠ると次の通りである。Tiercelin, Louis (1894), *L'Hermine*, le 20 mars 1894, pp. 271-272.
- 30 Emsavの語尾のsavはブルトン語で「立ち上がる」「復興する」「擁護する」「覚醒する」「解放する」等の行為を意味している (Nicolas 2007 : 26)。

参考文献

- Balibar, Étienne (1990), « Fichte et la frontière intérieure – À propos des Discours à la nation allemande » in *Les Cahiers de Fontenay – Philosophie et Politique en Allemagne (XVIII^e – XX^e siècles)*, n° 58/59, Saint-Cloud, E.N.S. Fontenay. 大西雅一郎訳 (1997) 「フィヒテと内的境界」、ルナン、エルネスト他、鶴飼哲他訳、『国民とは何か』、インスクリプト。
- Barash, Jeffrey (1990), « Identité nationale et identité linguistique chez le jeune J.G. Herder » in *Les Cahiers de Fontenay – Philosophie et Politique en Allemagne (XVIII^e – XX^e siècles)*, n° 58/59, Saint-Cloud, E.N.S. Fontenay.
- Cadiou, Georges (2013), *EMSAV Dictionnaire critique, histo-*

- rique et biographique. *Le mouvement breton de A à Z, Spézet, Coop Breizh.*
- Cheyronnaud, Jacques (1997), *Instructions pour un Recueil général de poésies populaires de la France 1852-1857*, Paris, Éditions Comité des travaux historiques et scientifiques.
- Fauriel, Claude (1824), *Chants populaires de la Grèce moderne*, Paris, Firmin Didot.
- Gourvil, Francis (1960), *Théodore-Claude-Henri Hersart de La Villemarqué et le Barzaz-Breiz*, Imprimerie Oberthur, Rennes.
- Guimar, Jean-Yves (1997), « Le Barzaz-Breiz de Théodore Hersart de la Villemarqué » in *Les Lieux de mémoire III sous la direction de Pierre Nora*, Quatro Gallimard, Paris, Éditions Gallimard.
- Herriou, Loeiz (1943), *La littérature bretonne : depuis les origines jusqu'au XX^e siècle suivie d'extraits traduits des meilleurs auteurs*, Hennebont, Éditions de Dihunamb.
- Hugo, Victor (1963), *Hernani in Théâtre complet*, tome I, « Bibliothèque de la Pléiade », Paris, Éditions Gallimard.
- (1964), Les Orientales in *Œuvres poétiques*, tome I, « Bibliothèque de la Pléiade », Paris, Éditions Gallimard.
- Lafaye, Benjamin (1884), *Dictionnaire des synonymes de la langue française avec une introduction sur la théorie des synonymes*, Paris, Librairie Hachette et C^{ie}.
- La Villemarqué, Théodore-Claude-Henri Hersart de (1963), *Barzaz-Breiz. Chants populaires de la Bretagne*, Paris, Librairie Académique, Perrin.
- (1839), *Barzaz-Breiz. Chants populaires de la Bretagne*, T. I, Paris, Delloye.
- (1846), *Barzaz-Breiz. Chants populaires de la Bretagne*, T. I, Paris, A Franck, Paris.
- La Villemarqué, Pierre Hersart de (1926), *La Villemarqué, sa vie et ses œuvres*, Paris, Honoré Champion.
- Luzel, François-Marie (1872), *De l'authenticité des chants du Barzaz-Breiz de M. de La Villemarqué*, Saint-Brieuc, Guyon Francisque.
- Mordrel, Olier (1973), *Breiz Atao ou histoire et actualité du nationalisme breton*, Paris, Éditions Alain Moreau.
- Morin, Benoît (1824), *Dictionnaire universel des synonymes de la langue française contenant les synonymes de Girard, indiqués par le Grand-Maitre de l'Université de France, pour l'usage des Collèges et ceux de Beauzée, Roubaud, Dalember, Diderot*. Paris, chez Mme veuve Dabo.
- Nerval, Gérard de (1993), « Les poètes du XVI^e siècle », *La Bohème galante, Œuvres complètes*, T. I, « Bibliothèque de la Pléiade », Paris, Éditions Gallimard.
- (1989), « Les vieilles ballades françaises », article daté du 10 juillet 1842, *La Sylphide, Œuvres complètes*, T. I, « Bibliothèque de la Pléiade », Paris, Éditions Gallimard.
- Nicolas, Michel (2007), *Histoire de la revendication bretonne ou la revanche de la démocratie locale sur le « démocratisme »*, Spézet, Coop Breizh.
- Pomian, Krzysztof (1997), « Francs et Gaulois » in *Les Lieux de mémoire II sous la direction de Pierre Nora*, Quatro Gallimard, Paris, Éditions Gallimard. 上垣豊訳 (2002)、「フランク人とガリア人」、『記憶の場—フランス国民意識の文化=社会史(対立)』第1巻、岩波書店。
- Renan, Ernest (1882), *Qu'est-ce qu'une nation ? Conférence faite en Sorbonne, le 11 mars 1882*, Paris, Calmann Lévy. 鶴飼哲他訳 (1997)、「国民とは何か」、インスクリプト。
- Rey, Alain, et al. (2016), *Dictionnaire historique de la langue française*, Paris, Dictionnaires Le Robert.
- Sand, George (1980), *Promenade autour d'un village, Œuvres complètes*, T. 28, Genève, Slatkine Reprints.
- Staël-Holstein (Madame de Staël), Anne Louise Germaine de (1852), *De l'Allemagne*, Paris, Librairie de Firmin Didot Frères. 梶谷温子・中村加津・大竹仁子他訳 (2002)、「ドイツ論」、鳥影社。
- Stendhal (1981), *Journal [1801-1817], Œuvres intimes*, tome I, « Bibliothèque de la Pléiade », Paris, Éditions Gallimard.
- Tanguy, Bernard (1977), *Aux origines du nationalisme breton*, T. I, Union Générale d'Éditions.
- Thiesse, Anne-Marie (2001), *La création des identités nationales. Europe XVIII^e - XIX^e siècle*, Collection « Points Histoire », Paris, Éditions du Seuil, l'édition avec la bibliographie mise à jour en 2001. 斎藤かぐみ訳 (2013)、「国民アイデンティティの創造——十八～十九世紀のヨーロッパ」、勁草書房。
- Van Tieghem, Paul (1917), *Ossian en France*, Paris, F. Rieder & Cie.
- Van Tieghem, Philippe (1944), *Le romantisme français*, Paris, Presse Universitaire de France. 辻昶訳 (1954)、「フランスロマン主義」、白水社。
- 會津伸 (1954)、「ヘルダーの民謡集形成」、『東北大學文學部研究年報』、東北大學文學部。
- アンダーソン, ベネディクト, 白石隆・白石さや訳 (2007)、「定本 想像の共同体——ナショナルイズムの起源と流行」、書籍工房早山。
- 稲垣直樹 (2009)、「世代対立と自由主義——『エルナ

- ニ』の実像に近づくために』、『エルナニ』、岩波書店。
- 大場静枝 (2016)、『語り継がれる民族の記憶——『バルザス=ブレイス』をめぐる』、『祈りと再生のコスモロジー』、成文堂。
- (2017)、『『バルザス=ブレイス』の受容をめぐる一考察——フランスにおける18世紀後半から19世紀の民謡の位置づけ』、『広島国際研究』第23巻、広島市立大学国際学部。
- (2018)、『訳者解説』、『ブルターニュ古謡集——バルザス=ブレイス』、彩流社。
- ゲーテ, ヨハン・ヴォルフガング・フォン、山崎章甫訳 (1997)、『詩と真実』、岩波文庫
- 嶋田洋一郎 (2018)、『解題』、『ヘルダー民謡集』、九州大学出版会。
- スミス, アントニー・D、巢山靖司・高城和義他訳 (1999)、『ネイションとエスニシティー——歴史社会的考察』、名古屋大学出版会。
- フィヒテ, ヨハン・ゴットリーブ、細見和之・上野成利訳 (1997)、『ドイツ国民に告ぐ』(抄訳)、ルナン, エルネスト他、鶴飼哲他訳 (1997)、『国民とは何か』、インスクリプト。
- ヘルダー, ヨハン・ゴットフリート、若林光夫訳 (1947)、『オシアン論』、養徳社。
- 嶋田洋一郎訳 (2018)、『ヘルダー民謡集』、九州大学出版会。
- 宮谷尚美訳 (2017)、『言語起源論』、講談社学術文庫。
- ホブズボーム, E.J.、浜林正夫他訳 (2001)、『ナショナリズムの歴史と現在』、大月書店。
- 八木輝明 (1977)、『ヘルダー『近代ドイツ文學断想』における古代と近代の相克』、『ドイツ文學』58巻、日本独文学会。
- ラ・ヴィルマルケ編、山内淳監訳・大場静枝他訳 (2018)、『ブルターニュ古謡集——バルザス=ブレイス』、彩流社。

19世紀のフランスの新聞・雑誌

Gazette de France, le 15 octobre 1839.

Revue de Bretagne, tome 30, 2^e série, 2^e année, n^o 7, 1903/07-1903/12, Lafolye Frères, 1903.

